

研修参加報告書

令和6年8月7日

会派名 江南クラブ
会派代表者 稲山 明敏

参加者：藤岡 和俊、牧野 行洋

研修参加の結果について、次のとおり報告します。

年月日	令和6年7月29日（月）～30日（火）
研修時間	7月29日（月）13:15～16:35 7月30日（火）9:00～12:20
研修場所	全国市町村国際文化研修所（JIAM）
研修内容	令和6年度 第2回市町村長等・議会議員特別セミナー 7月29日（月） 13:15～14:45 曖昧な弱者とその敵意～社会分断の新たな構造～ 成蹊大学文学部現代社会学科 教授 伊藤 昌亮 15:05～16:35 ともに生きる 未来につなぐ みんなでつくる 「健康しが2.0」 滋賀県知事 三日月 大造 7月30日（火） 9:00～10:30 「労働供給制約社会」への処方箋 —働き手不足1100万人が引き起こす危機と希望 リクルートワークス研究所 主任研究員 古屋 星斗 10:50～12:20 こどもたちの生きる力を育む ～「COLOMAGA プロジェクト」の活動の軌跡～ COLOMAGA プロジェクト本部事務局長／伊豆市版 KURURA 事務局 高橋 いづみ

研修参加報告書

■目的

4人の講師から各専門分野における分析と事例などを聞くことで、市政に役立つ情報と事例、それに日本各地の議員との交流を通して情報を交換する。

■内容

7月29日(月) 13:15~14:45

曖昧な弱者とその敵意 ~社会分断の新たな構造~

成蹊大学文学部現代社会学科 教授 伊藤 昌亮

冒頭に先月の都知事選で市長を辞任して立候補した石丸候補が得票数2位となって大躍進の要因と手法を分析・発表。

マジョリティとマイノリティの対立から「炎上」が起こる。一般的な認識ではマジョリティが強者で、マイノリティが弱者というシンプルな構造。この弱者にリベラルが味方して、二項対立が起こるのが従来型。これに新しい観点が加わり、SNSなどのネット空間では、かつてのマイノリティが発言力を増し、文化的影響力を持つようになる。一方で、経済的・社会的地位の低下に直面する中間層や、既得権益を脅かされる従来の主流層の一部が、「私達こそ、誰からも支援されない弱者だ」と主張を始める。この構図が、ネット上での新しい形の対立や炎上の背景にあると指摘。

15:05~16:35

ともに生きる 未来につなぐ みんなでつくる 「健康しが2.0」

滋賀県知事 三日月 大造

3期10年目の滋賀県知事が、自身の社会人としての経歴、松下政経塾卒業後の政治家としての経歴と政治家としての考え、滋賀県政における状況については、滋賀県の歴史・地理・文化、産業、暮らし・生活といった基本的なことにおける特徴・魅力と、それをこの10年間でどう良くしようとしたかという視点・政策について、資料を使いながら講演。

7月30日(火) 9:00~10:30

「労働供給制約社会」への処方箋

—働き手不足1100万人が引き起こす危機と希望

リクルートワークス研究所 主任研究員 古屋 星斗

2040年を待つまでもなく到来する1100万人にも及ぶ労働力不足の予想と対処法を解説。

具体的な数値で示した、労働力不足の現状と将来予測に対して、以下の対処法を提示し解説。

生産性向上(AI、IoT、ロボティクスの積極的導入と業務プロセスの効率化)

無駄な仕事を徹底的に減らす

多様な人材活用(高齢者(特に70歳以上)、女性、外国人の積極的な雇用)

人材育成(デジタルスキルの強化とリスキリングプログラムの導入)

特に、70歳以上の労働力活用に関しては、仕事というよりは趣味や地域活動の延長線上のような形、ワーキッシュアクトという社会貢献と報酬、仕事を混ぜた造語が、具体例とともに提案される。

10:50 ~ 12:20

子どもたちの生きる力を育む ~「COLOMAGA プロジェクト」の活動の軌跡~
COLOMAGA プロジェクト本部事務局長 / 伊豆市版 KURURA 事務局
高橋 いづみ

人口減少に悩む山間部の都市、伊豆市に住む、子どもと学生が主体となって、地域を発見し、地元に着愛を持ち、作成している雑誌「COLOMAGA」が発行されて10年。大学などで市外に出ても、卒業後に返ってくる割合が増えた状況を解説。

■所感

○曖昧な弱者とその敵意 ~社会分断の新たな構造~

従来の社会階層の概念が揺らぐ中、文化資本の差異が新たな分断線となり、それがオンライン上の議論や対立に反映されているという分析は、現代のネット社会の複雑な力学を理解する上で重要な視点。

単純な二項対立では捉えきれないネット社会の実態を浮き彫りにし、新たな考察の機会を得た。

石丸候補が得票数2位となった大躍進の要因分析として、従来と異なる視点を訴え、それが30代以下だけでなく、それ以外の年代の得票に繋がったことは興味深く感じた。

○ともに生きる 未来につなぐ みんなでつくる 「健康しが2.0」

県知事は、滋賀の状況、見どころ、特徴を非常にわかりやすくプレゼンされた。「自分の地域の魅力をプレゼン」できるという能力は、自治体の魅力を売り込むセールスマンのようで、政治家として重要な資質だと感じた。

また、滋賀県に走る鉄道を上下方式に分け、資金は県が出す政策をとったが、それをなす時のやり方や注意点、各市における維持・メンテナンスと利益の割合、説明後の滋賀県の市議会議員とのやり取りは、政治の公正と分配と負担について、大いに勉強になった。

○「労働供給制約社会」への処方箋

データと計測モデルの結果として、2040年をまたず、1100万人の労働力が足りなくなる。その影響は、建設、上下水道、医療・介護、輸送・宅配といった生活の基本になる部分における決定的な労働力不足となって社会維持自体が困難になると示され、大きな衝撃を受けた。

労働力不足対策として、徹底的な無駄の削除と海外人材の活用といった一般的なものに加え、講師が作ったワーキッシュアクトという概念は、30代以降の世代と相性も良く、拡大展開するための対策が重要性であると感じた。

○こどもたちの生きる力を育む ～「COLOMAGA プロジェクト」の活動の軌跡～

伊豆半島の山間部にある伊豆市への移住者である講師が、若年層の人口流出は、地域への愛着が低いことが原因であると見定め、地元の印刷業の協力者とともに、地元の小中学生が地域の人を訪問取材し、それをプロの編集者と協力しながら、「COLOMAGA」という冊子にして、地域に配る活動を10年以上行ったことによる成果について発表された中で、参加した子供達の地元への認識・愛着が上昇し、自ら高校生以降も冊子編集に携わりたいと新組織を提案したり、大卒後に地元に戻ってくる人が出たということが印象に残った。

また、10年以上、寄付と営業のみでこの活動を継続していることも驚いた。

江南市としても、布袋小中の学校で、地元史の取材や自主活動が行われているが、このプロジェクトの仕組みを取り入れることで、よい循環を生み出せる可能性があるのではないかと感じた。

今回の研修を通じて、それぞれに参考とするところが多くあったが、特に三日月知事の県政への取り組みや、地元における調整、古屋氏の労働供給制約社会のデータの分析と対処法の考え方は、江南市政へ置き換えて応用することが出来ると感じた。